

翻刻および諸本校異

凡例

- 一、本文は、東山御文庫本の行款に従って、現行字体による忠実な翻刻に努めたが、読み易さをはかって、文節分かち書きを施した。(ただし、おのずから分節効果をなす漢字の前後まではいちいち切らない。)
- 二、括弧内に本文丁数と表・裏を示し、上部に5・10行の行数指示を付した。
- 三、内容によって全篇を二四節に分けた校注書(次田香澄・笠間書院刊)との連絡を考慮して、その切れ目に当る行頭に太字で節数を示した。
- 四、下欄に諸本による校異を示した。校本およびその略号は次の通りである。

㊦ 尊経閣文庫本

㊧ 松平文庫本

㊨ 扶桑拾葉集本

㊩ 群書類従本(板本)

また、底本の東山御文庫本は㊦、底本以外の諸本をまとめ言う場合には㊦を用いた。

なお、校注書による意改本文等を(一説)と注して掲げた。

- 五、諸本校異のうち、単に漢字とかなの区別に過ぎないものは掲出しない。ただし「夜」よ」「音」をと」のごとく、底本の漢字のよみや校本のかなづかいに係わるものは適宜採りあげた。

- 六、校異はおおむね当該行の下部に示すように努めたが、項目の多い場合は左右にずれることとなった。掲出形式は次の通りである。

行数・当該語句―異文・校本略号(―異文・校本略号)

- 七、底本の語形に近いものから序でるのを原則とし、同形の場合は㊦㊧㊨の順に従った。
- 八、説明の必要な場合には「」内に注した。説明部分にはカタカナを用いた。

うたゝね

安嘉門院四條

1 うたゝねーうたゝねの記⑩

2 安嘉門院四條ー阿仏⑦⑧ーナシ⑨⑪

一ものおもふ事のなくさむにはあらねともねぬよの

ともとならひにける月のひかりまちいてぬれは

・ れいのつまとをしあけてたゝひとりみいた

したるあれたる庭の秋の露かこちかほな

る虫のねも物ことに心をいたましむるつまとなり

ければ心に乱れおつるなみたををさへてとはか

りこしかたゆくさきを思ひつゝくるにきも

¹⁰ あさましくはかなかりける契りの程をなとか

くしも思ひいれけんと我心のみそかへすくうら

(一才)

6 秋の露ー秋露⑩

5 をしあけてーおしあけて⑩

8 乱れおつるーみたれをつる⑩
8 をさへてーおさへて⑩

11 けんーけむ⑩⑪

11 我心ーわかこゝろ⑩⑪

ニめしかりける 夢うつゝとも わきかたかりし

(一ウ)

宵のまよりせきもりのうちぬる程をたにいたくも

たとらすなりにしや打しきる夢の通ひちは一夜

はかりのとたえもあるましきやうにならひにけるを

5 さるはつき草のあたなる色をかねてしらぬにしも

あらざりしかといかにうつりいかにそめけるこゝろ

にかきもうちつけにあやにくなりし心まよひには

ふし柴のとたえにおもひしらざりけるやうく色

つきぬ秋のかせのうき身にしらるゝこゝろそ

10 たてくかなしきものなりけるををつからた

むる宵はありしにもあらずうちすくるかねの

3 なりにしやーなりにしにや③④

4 とたえーとたへ④

7 心まよひー心まとひ④ーこゝろまとひ④

8 とたえにーとたへに④ーとたに④⑤にハ変

10 をのつからーおのつから④
10 たむるーたのむる④(行末ノ脱)

ひゝきをつくくときふしたるもいける心ちたに

せねはけに今さらにとりはものかはとそおもひ

しられけるさすかにたえぬ夢の心ちはありしに

かはるけちめもみえぬものからとにかくにきはり

5 かちなるあしわけにて舟落敷神な月にもなりぬふりみ

ふらすみさためなきころの空のけしきはいと袖

のいとまなき心ちしておきふしなかめわふれと

たえてほとふるおほつかなさのならばぬ日かすの

へたつるもいまはかくにこそとおもひなりぬるよの

10 心ほそさそなにゝたとへてもあかすかなしかりける

11 いとせめてあくかるゝ心もよほすにやにはかにう

3 たえぬ―たへぬ⑦

5 あしわけにて(⑤)ハけノ右下ニ舟落敷ト傍書―あしわけ舟にて⑦―あしわけ船にて⑧

7 おきふし―をきふし⑨

8 たえて―たへて⑩

(二才)

11 もよほす―もよほす⑪

つまぎにまうてゝんとおもひ立ぬるもかつうはいと

(二ウ)

あやしく仏の御心の中はつかしけれとふたはより

2 御心の中 (㉒ノハ補入) — み心の中 ㉒

まいりなれにしかはすくれてたのもしき心ちして

心つからのなやましきもうれへきこえんとにやあらむ

4 うれへきこえん—愁ひきこえむ ㉒

5 しはく御まへにともなる人々時雨しぬへしはや

5 しはく—しはしは (一説)
5 人々—人— ㉒ ㉒

かへり給へなといへはこゝろにもあらずいそぎいつる

にほうこんかう院の紅葉このころそさかりと見

7 ほうこんかう院—ほうこんこう院 ㉒
7 見えて—みへて ㉒

えていとおもしろければすきかてにおりぬかうらんの

8 おりぬ—をりぬ ㉒

つまなるいはのうへにおりゐて山のかたをみやれば木々

9 つまなる—つまの ㉒
9 うへ—うゑ ㉒

10 の紅葉色々に見えて松にかゝれる枝心の色もほかには

10 色々に—色—に ㉒ ㉒
10 枝—つたの ㉒ (つハ変、いとつノ中間ノゴトキ字体)

なる心地していとみ所おほかるにうきふるさとは

10 ほかにはなる (㉒ハはトナノ間ニ補入符)
—ほかにもことなる ㉒

いとゝわすられぬるにやとみにもたゝれすおりしも

1 おりしも—さりしも⑥

風さへ吹てものははかしくなりければみさすやうにて

たつ程

人しれすちきりしなかのここの葉を

あらしふけとはおもはさりしを

とおもひつゝくるにもすへて思さひさますることなきころ

④のうちならんかし 帰かへてもいとくるしければうちやすみ

たるほと御ふみとてとりいれたるもむねうちさはき

てひきひろけたればたゝいまの空のあはれにひ

⑩ころのをこたりをとりそへてこまやかにかきなされ

たるすみつき筆のなかれもいとみところあれと

(三才)

6 思ひまする(⑥ハひノ右下ニ補入、すニ
さ敷ト傍書)―思ひさすなる⑦⑧

7 帰ても―帰りても⑨―返ても⑩―かへりて
も⑪

れいのなか／＼かきみたすこゝろまよひにことの葉

(三ウ)

のつゝきも見えずなりぬれは御かへりもいかゞ聞えけん

2 聞えけんーきこえけむ⑤

なこりもいと心ほそくてこの御文をつく／＼とみるにも

3 心ほそくてー心ほほそくて⑥

日比のつらさはみなわすられぬるも人わろき心の程や

5 とまたうちをかれて

これやさはとふにつらさのかす／＼に

6 とふにーとふも⑦

なみたをそふる水くきのあと

れいの人しれすなかみちちかきそらにたにたと

／＼しきゆふやみにちきりたかへぬしるへはかり

10 にてつきせす夢のこゝちするにもいてきこえん

かたなければたゞいひしらぬなみたのみむせかへり

たるあか月にもなりぬまくらにちかきかねのをとも

たゝいまのいのちをかきる心ちして我にもあらず

おきわかれにし袖の露いとゝかこちかましくて君

やこしもおもひわかれぬなかみちにれいのたの

もし人にてすへりいてぬるもかへすゝ夢こゝち

五 なんしける かのところにはむめきたのかた月ころ

わつらひ給けるかつるにきえはて給にければその

ほとのみきれにやまたほとふるもことはりなからいひ

したかふつらさはしもありしにまざる心地

10 するはいかにおほしまとふらんととりわきたりける御

思ひのなこりもいとくるしくをしはかり聞ゆれと

(四才)

5 いてぬるーいてゐる㊶
5 夢ー夢の㊶

6 なんーなむの㊶㊷
6 月ころーナシ㊸

7 つるにーついに㊹
7 きえはてーきへはて㊹

10 らんーらむ㊺

11 をしはかりーおしはかり㊻

あはれしるころのほとなか／＼きこえんかたなくて (四ウ)

日かすふるいふせさをかれ／＼そおとろかし給つるつ

れなきよのあはれさもみつからきこえあはせたくなと

あはれいのうちぬるほと鐘のひ／＼きに人しれ

5 したのみをかくるもおもへはあさましくよのつねな

らすあたる身のゆくゑつゐにいかになりはてんと

すらんと心ほそく思ひつゝくるにもありしなからの

心ならましかはうきたる身のとかもかうまては思ひ

しらすすすきましなと思ひつゝくるにらまひなり

10 身のうさもやるかたなく悲しければこよひはつれなく

てやみなましなと思ひみたるゝにれいのまつほと

3 きこえ—きこゑ◎

6 つゐに—ついに◎
6 なりはてん—なりはてむ◎

7 すらん—すらむ◎

9 すきまし—すきなまし◎
◎

すきぬるはいかなるにかとさすかめもあはすみしろ

きふしたるにかのちいさきわらはにやしひやかに

うちたゝくをきゝつけたるにはかしこくおもひしつ

めるこゝろもいかなりぬるにかやをらすへりいてぬるもわれ

5 なからうとましきに月もいみしくあかけれはいとはし

たなきこゝちしてすいかいのおれのこりたるひまにた

ちかくるゝもかのひたちのみやの御すまる思ひいて

らるゝにいるかたしたふ人の御さまそことたかひて

おはしけれと立よる人の御おもかけはしもさとわ

10 かぬひかりにもならひぬへきこゝちするはあなち思ひ

いてられてさすかにおほしいつるおりもやと心を

(五才)

2 ちいさきーちぬさき⑩

3 しつめるーしつむる⑩⑪ーしつめつる⑩

4 いかなりぬるーいかなになりぬる⑩⑪

6 おれのこりたるーをれのこりたる⑩⑪

7 御すまるー御すまひ⑩

9 おはしけれーをはしけれ⑩

10 あなちーあなちに⑩⑪

11 おほしいつるーをほしいつる⑩⑪ー覚し出る⑩⑪

やりておもひつゝくるにはつかしきこともおほかり

(五ウ)

六 しはすにもなりぬゆきかきくらすして風もいとすざ

2 しはすーしわす㊦㊧

ましき日いとくおろしまはして人三人はかりして

物かたりなとするに夜もいたく更ぬとて人はみな

4 夜もーよも㊦㊧

五 ねぬれと露まとろまれぬにやをらおきいてゝみる

5 おきいてゝーをきいてゝ㊦

によひには雲かくれたりつる月のうきくもまか

はずなりなから山のはちかきひかりのほのかにみ

ゆるは七日の月なりけりみし夜のかきりもこよひ

8 夜のーよの㊦

そかしと思ひいつるにたゝそのおりの心ちしてさた

9 おりーをり㊦

10 かにもおほえすなりぬる御おもかけさへさしむかひ

10 御おもかけー御おもかけ㊦

たる心ちするにまつかきくらす涙に月のかけも

見えすとて仏などの見え給つるにやとおもふに

はつかしくもたのもしくもなりぬさるは月日にそへ

てたへしのふへきこゝちもせず心つくしなること

のみまされはよしやおもへはやすきとことばりに思ひ

。たちぬる心のつきぬるそ有し夢のしるしにやとうれ

しかりける今はとものおもひなりにしもといへは

七 えにかなしきことおほかりける 春ののとやかなる

に何となくつもりにける手ならひのほんこなとや

りかへすつるてにかの御文とをとりいて、みれば

10 むめかえの色つきそめしはしめより冬草かれは

つるまでおりくのあはれしのひかたきふしくを

1 見えすとて―見え給つる―みへ給つるの

6 おもひなりにしも―おもひなるにしも―
思ひなるにしも

8 何となく―なにとなく
8 ほんこ―ほうこ

9 つるてに―ついでに
9 御文とを―御文とも

10 むめかえ―むめかへ

(六ウ)

1 聞えかはしける―きこゑかわしける①
 1 つもりにける―積ける②

うちとけて聞えかはしけることの つもりにける ほと
 も今はとみるはあはれあさからぬ なかにいつそや

つねよりもめとまりぬらんかしとおぼゆるほとにこ

なたのあるしこよひはいときひしく物おそろしき

5 こゝちするにこゝにふし給へとて我かたへもかへ

らすなりぬあなむつかしとおほゆれとせめて心の

おにもおそろしければかへりなんともいはてふしぬ

人はみな何心なくね入ぬる程にやをらすへりいれは

ともし火の残りて心ほそき光なるに人やおとろ

10 かとゆゝしくおそろしけれとたゝしやうし

ひとへをへたてたる居ところなればひるよりよう

4 物おそろしき―ものをそろしき①

5 我かたへも―わかゝたへも②

7 おに―をに③

7 おそろしければ―をそろしければ④
 7 かへりなん―かへりなむ⑤

8 すへりいれは―すへり出れは⑥

9 おとろかん―をとろかん⑦

11 ひとへを―ひとつを⑧
 11 居ところ―いところ⑨
 ⑩―あところ⑪

いしつるはきみはこのふたなどのほとなく手にさはるも

いとうれしくてかみを引わくるほとそさすかそゝろお

そろしかりけるそきおとしぬれはこのふたにうち

いれてかきをきつる文なともとりくしてをかんと

8 するほといてつるしやうし口より火のひかりのなをほの

かにみゆるに文かきつくるすゝりのふたもせて有

けるかかたはらにみゆるを引よせてそきおとしたる

かみをおしつゝみたるみちの国かみのかたはらにたゝ

うちおもふ事をかきつくれと外なるともし火の

10 ひかりなれは筆のたちとも見えす

なけきつゝ身をはやきせのそことたに

(七オ)

2 そゝろーナン⑩

3 そきおとしぬれはーそきをとしぬれは⑩
3 このふたにーはこのふたに⑩

4 かきおきつるーかきをきつる⑩⑪⑫ーかき
置つる⑫

4 文なともーふみとも⑫
4 をかんーをかむ⑫

7 そきおとしたるーそきをとしたる⑩

8 かみをおしつゝみたるーかみをゝしつゝみ
たる⑩⑪ーかみをしつゝみたる⑩
8 みちの国かみーみちのくにかみ⑩

9 かきつくれとーかきつくれと⑩

11 なけきつゝ(つゝニ⑩ハ佐イ、⑫ハわひ
と傍書)ーなけきわひ⑩

しらすまよはんあとそかなしき

(七ウ)

八身をもなけてんとおもひけるにや たゞ今もいてぬへき

こゝちしてやをらはしをあげたればつこもり比の月

なき空にあまくもさへたちかさなりていとものおそ

ろしうくらきに夜もまたふかきにとのゐる人

さへ折しも打こはつくろふもむつかしときゝゐたるに

かくても人にやみつけれんとそらおそろしければもと

のやうにいりてふしぬれとかたはらなる人うちみ

しろきたにせずさきくもとのゐる人の夜ふかく

10 かとをあげていつるならひなりければそのほとを人

しれすまつにこよひしもとくあげて出ぬるをと

4 ものおそろしう―物をそろしう

5 夜も―よも

6 折しも―をりしも

6 打こはつくろふ―うちはつくろふ

7 そらおそろしければ―そらをそろしければ

9 とのゐる人―とのゐる人

11 をと―おと

すれはさるは心さす道もはかしくもおほえすこゝも

みやこにはあらずきた山のふもとゝいふ所なれは人めし

けからず木の葉のかけにつきて夢のやうにみ

をきし山ちをたゝひとり行こゝちいといたくあやう

くものおそろしかりける山人のめにもとかめぬまゝに

あやしくものくるをしきすかたしたるもすへてう

つゝのことゝもおほえすさてもかのところにし山の

ふもとなれはいとはるか成によなかよりふりいて

つるあめのあぐるまゝにしほくとぬるゝほどになり

ぬふるさとよりさかのわたりまではすこしもへたゝ

らすみわたさるゝほどの道なれはさはりなく行つきぬ

4 行―ゆく④⑤

5 ものおそろし―物をそろし④―おそろし④

6 ものくるをしき―ものくるおしき④

8 はるか成に―はるかなるに④⑤⑥

(八才)

11 行つきぬ―ゆきつきぬ④⑤⑥

九 夜もやうくほのくとするほとになりぬれはみち

(八ウ)

1 夜もよも①

ゆき人もこゝもとはいとあやしととかむる人もあれは

ものむつかしくおそろしき事この世にはいつかはおほ

3 おそろしき―をそろしき①
3 おほえん―おほえむ②③

えんたゝ―すちになきになしはてつる身なれはあし

5 のゆくにまかせてはや山ふかく入なんとうちもやす

5 入なん―いりなん④―入なむ⑤

まぬまゝにくるしくたへかたきことしぬはかりなり

6 たへかたき―たえかたき⑥

いるあらしの山のふもとにちかつく程雨ゆゝしく

ふりまさりてむかへの山をみれば雲のいくへともなく

8 いくへとも―いくとも⑦

おりかさなりてゆくさきも見えずからうしてほう

9 おりかさなりて―をりかさなりて⑧

10 りんのまへすきぬれとはては山ちにまよひぬるそ

10 まへ―まへは⑨⑩
10 すきぬれと―過ぬれは⑪

すへきかたなきやおしからぬ命もたゝ今そ心ほそ

くかなしきいと、かきくらす涙のあめさへふりそひ

てこしかた行さきも見えず思ふにもいふにも

たらずいまとちめはてつるいのちなれは身の

こぬれとをりたること伊勢のあまにもこえたり いたく

5 まはりはてにければ松かせのあらくしきをたの

もし人にてこれもみやこのかたよりとおほえてみ

のかきなときてさえつりくる女ありこわらはのおな

しこゑなるとものかたりする也けりこれやかつらの

さとの人ならんとみゆるにた、あよみにあゆ

10 みよりてこれはなに人そあな心う御まへは人のて

をにけいて給かまたくちろんなどをし給たりける

1 ぶりそひてーふりそへて㊶

2 行さきもーはくさきも㊶㊷㊸

4 こえたりーこへたり㊹

5 まはりはてにければーよはりはてにければ
(一説)

7 さえつりくるーさへつりくる㊺

9 人ならんー人ならむ㊻
あよみにーあゆみに㊼

11 ちろんーちろむ㊽
し給たりけるにかーし給たりけるか㊾

(九オ)

にかなにゆへかゝるおほあめにふられてこの山な

(九ウ)

1 山なかへは―山中へ㊶

かへはいて給ぬるそいつくよりいつくをさしておはす

2 おはするそ―をはするそ㊶

るそあやし〜ときえつるなといふ心にかしたを

3 さえつる―さへつる㊶

たひ〜ならしてあないとおし〜とくりかへし

4 いとおし―いとをし㊶㊶

5 いふそうれしかりけるしきりに身のありさま

をたつぬれはこれは人をうらむるにもあらずまた

くちろんとかやをもせずたゝおもふことありてこのや

7 くちろん〜くちろむ㊶

まのおくにたつぬへきことありて夜ふかくいて

8 おく〜をく㊶

つれとあめもおひたゝしく山ちさへまとひてこし

9 おひたゝしく〜をひたゝしく㊶㊶

10 かたもおほえす行ききもえしらすしぬへき心地さ

10 行ききも〜ゆくさきも㊶㊶

へすれはこゝによりゐたる世おなしくそのあたり

11 よりゐたる〜よりいたる㊶
11 おなしく〜おなしくは㊶㊶㊶―をなしくは㊶

までみち引たまひてんやといへはいよくいとおし

1 いとおしかりてーいとほしかりて④ーいと
をしかりて④

かりて手をひかへてみちひくなさけのふかさを仏の御

しるへにやとまでうれしくありかたかりけるほとなくを

二くりつけてかへりぬ まちとるところにもあやしく

・ものくるをしきものゝさまかなとみおとろく人おほ

5 みおとろくーみをとろく⑤

かるらめなれともかつらのさと人のなさけにをとら

6 さとらめやはーおとらめやは⑥⑦

めやはさまゝにたすけあつかはるゝほと山ちはなを人

のこゝちなりけるかいまはとうちやすむほとすへて

こゝちもうせて露はかりおきもあかられすいたつら

9 おきもーをきも⑨

10 ものにてふしたりしをみやこ人さへおもひのほ

かにたつねしるたよりありて三日はかりはとにかくに

(十才)

さはりしかともひとひにほいとけにしかは一すちにうち (十ウ)

もうれしく思ひなりぬさてこの所をみるにうき世な

からかゝるところもありけりとすくおもふさまなる

にをこなひなれたるあまきみたちのよひあか月の

あかをとたゝすこゝかしこにせぬれいのをとなとをきく

につけてもそゝろにつもりけむとし月のつみもかゝ

らぬところにてやみなましかはいかにせましとおもひ

いつるにそみもゆるこゝちしけるふるさとのにはも

せにうきをしらせしあきかせはほけ三まいのみねの

10 松かせに吹かよひなかわるかとおもかけそみし月

かけはりやうしゆせんの雲井はるかに心を送るしる

1ひとひにーひといに㊶
1うちもーうきも㊷

2うき世ーうきよ㊸

4をこなひーおこなひ㊹

5あかーあかの㊺

5をとたゝすこゝかしこにーおとたゝすこし
かしこに㊻㊼ノおハをーをとたらす
爰かしこに㊽㊾ーをとたえすこゝかしこに
(一説)

6つもりけむーつもりけん㊿㊾㊿

7おもひいつるー思ひ出る㊿㊾思ひつる㊿

10吹かよひーふきかよひ㊿㊿
おもかけそみしー面かけと見し㊿㊿

へとそなりにける

すてゝいてしもしのみやまの月ならて

たれをよなく恋わたりけん

三ゆたのたゆたにものをのみおもひくちにしはては

5 うつゝ心もあらずあくかれそめにければさまゝよの

ためしにもなりぬへくおもひのほかになすらふる身

のゆくゑををつからおもひしつむる時なきにしも

あらねはかりの世の夢の中なるなけきはかりにもあ

らすくらきよりくらきにたとらむなかき夜のま

10 とひをおもふにもいとせめてかなしけれと心はこゝろ

として猶思ひなれにしゆふくれのなかめにうちそ

2 もしの一わしの②⑧

5 うつゝ心もーうつし心も②④

6 さすらふるーさすらふる②④

7 ゆくゑーゆくへ④

8 かりの世のーかかりの世の④〔改行ノ符〕

9 くらきより〔⑦ノキハ補入〕

9 たとらむーたとらん②④

9 夜のーよの②④⑧

11 猶ーなを②④

ひてひとかたならぬ恨もなげきもせきやるかたなき (十一ウ)

むねのうちをはかなき水くきのをのつからこゝろの行

たよりもやとて人しれすかきなかせといとゞしき

なみたのもよほしになんいてやをのつからおほかたのよの

5 なさけをすてぬなけのあはれはかりをおりくくにちり

くることの葉もありしにこそ露のいのちをもかけて

けふまでもなからへてけるをうき世の人のつらきいつ

はりにさへ ならひか なひはてにけることもあるにや 同し世とも

おほえぬまてにへたゝりはてにければちかのしほかま

10 もいとかなき心ちして

みちのくのつほのいしふみかきたえて

2 行―ゆく⑦⑧

4 もよほし―もよをし⑩

4 なん―なむ⑩

4 をのつから―おのつから⑩

5 おりくくに―をりくくに⑩

6 いのちをも (⑩ノをハ補入)

7 うき世の―うきよの⑩

8 なひはてにける (⑩ハなひニならひかト傍書)―ならひはてにける⑩

9 へたゝりはてにければ―隔りててにければ⑩

11 かきたえて―かきたえて⑩

はるけきなかとなりけるかな

三日ころふりつるあめのなこりにたちまふ雲間のゆふ

2 雲間の―雲まの⑦⑧⑨
2 ゆふつく夜の―ゆふつくよの⑦⑧⑨

つく夜のかけほのかなるにをしあけかたならねとうき

人しもとあやにくなるこゝちすればつまとは引たて

4 引たてつれと―ひきたてつれと⑦⑧⑨⑩

5 つれとかとちかくほそき川のなかれたる水のまさるにや

5 川―河⑦

つねよりもをとするこゝちするにもいつのとしにか

6 をとする⑦⑧ノすハ補入

あらんこの川に水の出たちし世人しれすなみをわけ

7 あらん―あらむ⑦

7 この川に―此川の⑧

7 出たちし世―いたりし世⑦⑧―出たりしに⑦⑧

し事など只いまのやうにおほえて

おもひいつるほとにもなみはさはきけり

10 うきせをわけて中川の水

10 うきせを―うきよを⑩

あれたる庭にくれ竹のたゝすこしうちなひきたる

(十二才)

さへそゝろにうらめしきつまとなるにや

(十二ウ)

よとゝもにおもひいつれはくれたけの

2 おもひいつれは—おもひいつれと⑦

うらめしからぬそのふしもなし

をのつからことのつゐてになとはかりおとろかしきこえ

4 をのつから—おのつから⑦
4 つゐてに—つゐてに⑦⑧
4 おとろかし—をとろかし⑦

5 たるにもよのわつらはしきにおもひなからのみなん

5 なん—なむ⑦

さるへきつゐてもなくてみつからきこえさせすなと

6 つゐても—つひても⑦—ついても⑧
6 きこえさせす—きこえさせす⑦

なをさりにかきすてられたるもいと心うくて

きえはてんけふりののちのくもをだに

8 きえはてん—きえはてむ⑦
8 けふりののちの—煙のゝちの⑧—けふりの
くちの⑦⑧

よもなかめしな人めもるとて

10 とおほゆれとこゝろの中はかりにてくたしはてぬるはいと

10 中—うち⑦

11 其比こゝ地れいならぬことありて命もあや

11 其比—そのころ⑦⑧

うきほとなるをこゝなからともかくもなりなはわつら

はしかるへければおもひかけぬたよりにてをたきの

ちかき所にてはかなぎやとりもとめてゝうつろひなんと

すかくとたに聞えさせまほしけれとはすかたりも

5 あやしくてなく／＼かとをひきいつるおりしもさきに

たちたるくるまありさきはなやかにおひてこそんなと

こと／＼しくみゆるをたれはかりにかとめとゝめかたければ

かの人しれすうらみきこゆる人なりけりかほしるき

すいしんなとまかふへうもあらねはかくとはおほし

10 よらぎらめとそゝろにくるまの中はつかしくはした

なきこゝちしなからいま一たびそれとはかりも見をく

(十三才)

2をたきのーおたきの②

3うつろひなんーうつろひなむ③

5おりしもーをりしも⑤

6おひてーをひて⑥

7とゝめかたければーとゝめたりければ⑦

りきこゆるはいとうれしくもあはれにもさまく

(十三ウ)

むねしつかならずつるにこなたかなたへゆきわかれ

2 つるに―ついに㊶

給ほといといたうかへりみかちにこゝろほそしかのどこ

3 給ほと―給程㊶㊷―給ふほと㊸―給ふ程㊹
3 こゝろほそし―心ほそし㊶―ナン㊷㊸(ハ
ハ錯簡)

ろに行つきたれはかねてきゝつるよりもあやしく

4 行つきたれは―ゆきつきたれは㊸

5 はかなけなる所のさまなれはいかにしてたへしのふへく

もあらず暮はつる空のけしきも日ころにこえて

6 暮はつる空の―くれはつるそらの㊶㊷
6 こえて―こへて㊸

心ほそくかなし宵ねすへきともゝなければあやしく

7 宵ね―よひね㊶―よひぬ㊷―宵ぬ㊸

しきもさためぬとふのすかこもにたゝひとりうち

ふしたれとゝけてしもねられす

10 はかなしなみしかき夜半の草まくら

10 みしかき―みちかき㊶

むすふともなきうたゝねのゆめ

日ころふれととひくる人もなく心ほそきまゝにきやう

1 なくーなし⑦⑧

つとてに持たるはかりそたのもしきともなりけるせかい

2 持たるーもちたる⑨⑩

ふらうことあるところをしるておもひつゝけてそ

うき世の夢もをのつから思ひさますたよりなりける

・ けふかあすかと心ほそきいのちなからうつきにもなりぬ

三 いさよひのひかり待いてゝ程なきまとのしとみたつ

6 待いてゝーまちいてゝ⑪⑫ーまち出て⑬⑭

ものもおろさすつくゝとなかめいてたるにはかなけ

7 おろさすーをろさす⑮
7 つくゝとーつらゝと⑯

なるかきねの草にまとかなる月かけに所からあ

はれすくなからす

10 をく露のいのちまつまのかりのいほに

こころほそくもやとる月かけ

(十四才)

いつくにかあらんかすかに笛のをとの聞えくるかの御 (十四ウ)

あたりなりしねにまよひたるこゝちするにもきと

むねふたかる心ちするを

まちなれしふるさとをたにとはさりし

人はこゝまでおもひやはよる

さても猶うきにたへたるいのちのかきりありければ

やうく心ちもをこたりさまになりたるをかくてし

もやとて又ふるさとにたちかへるにもまつならぬ

木すゑたにそゝろにはつかしくみまはされて

きえかへりまたはくへしとおもひまや

露のいのちの庭のあさちふ

1 あらん—あらむ②

1 笛のをと—ふえのをと②—笛の音②④—ふへのおと④

1 聞えくる—きこゑくるか④

2 まよひたる—まかひたる(一説)

6 猶—なを④

7 をこたり—おこたり④

7 なりたるを—なりぬるを④⑤

1010 きえかへり—消かへり④⑤—きへ返り④
またはくへしと—またいくへしと(一説)

二 天なけきなからはかなくすきて秋にもなりぬなかき

おもひのよもすからやむともなきゝぬたの音ねやちか

2 音—をと㊶㊷

ききりくすのこゑみたれも一かたならぬねさめのもよ

3 こゑ—こゑの㊸
3 もよほし—もよほし㊹

ほしなれはかへにそむけるともしひのかけはかりを友

4 かけはかりを—かけはかり㊺

5 としてあくるをまつもしつ心なくつきせぬ涙のし

つくはまとうつあめよりもなりいとせめてわひはつる

なくさみにさそふ水たにあらはと朝夕のこと草に

なりぬるをそのころのちのおやとかのたのむへきことはり

8 おや—をや㊻
8 とかの—とか㊼

もあさからぬひとしもとをつあふみとかやきくもはる

10 けき道をわけてみやこの物まうてせんとてのほり

10 物まうて—ものもうて㊽

きたるに何となくこまやかなり物かたりなとする

(十五才)

11 何となく—なにとなく㊾
11 こまやかなり—こまやかなる㊿

つゐてにかくてつく／＼とおはせんよりはる中のす (十五ウ)

まるもみつゝなくさみ給へかしかしこも物さはかしくも

あらすすまさん人はみぬへきさまなるとなをさり

なくいさなへとさすかひたまちにふりはなれなむ

・みやこのなこりもいつくをしのお心にか心ほそく思ひ

わつらはるれとあらぬすまゐに身をかへたとおも

ひなしてとたにうきをわするゝたよりもやとあや

七なく思ひたちぬくたるへき日にもなりぬ夜ふかくみや

こをいてなんとするにころは神な月の廿日あまり

10 なれはあり明の光もいと心ほそくかせのをともす

さまざま身にしみとをる心ちするに人はみなおき

1 つゐてに—ついでに㉔
1 おはせん—をはせん㉔
1 すまゐ—すまひ㉔ ㉕) ㉖) ハひつると訂

3 すまさん—すまさむ㉔) 心すまさん㉔
3 みぬへき—すみぬへき㉔

4 ふりはなれなむ—ふりはなれなん㉔

6 すまゐに—すまひに㉔

8 夜ふかく—よふかく㉔

10 あり明—在明㉔) 有明㉔

11 おき—をき㉔

さはけと人しれすこゝろはかりにはさてもいかにさすら

ふる身の行急にかとたゝいまになりては心ほそきこと

のみおほかれとさりとてとゝまるへきにもあらねは出ぬる

みちすからまつかきくらす涙のみさきにたちて心ほそ

くかなしきことそなにゝたとふへしともおほえぬほと

なくあふさか山にもなりぬをとに聞しせきのし水も

たえぬなみたとのみ思ひなされて

こえわふるあふさかやまのやまみつは

わかれにたえぬなみたとそみる

10 あふみのくにのちといふところよりあめかきくらしふり

いてゝみやこの山をかへりみればかすみにそれとたに
(十六才)

2行急―ゆく急

6あふさか山にも―逢坂山に
6をとおと

7たえぬ―たへぬ
7なみたとのみ(7ノとハ補入)

8こえわふる―こえわふる

9たえぬ―たへぬ

見えすへたゞり行もそゝろに心ほそく何とて思ひ

(十六ウ)

1 行もーゆくも㊦

たちけんとかやしきことかすしらすとてもかく

てもねのみなきかちなり

すみわひてたちわかれぬるふるざとも

きてはくやしき旅ころもかな

六みちのほとめとゞまる所々おほかれとこゝはいつくく

ともけちかくとふへき人もなければいつくに野も山も

はるくくとゆくをとまりもしらす人のゆくにまかせて

夢ちをたとるやうにて日かすふるまゝにさすかなら

10 はぬひなのなかにおとろへはつる身もわれかの

こゝちのみしてみのをはりのさかひにもなりぬすのまた

6 所々ー所く㊦㊧
6 おほかれとーをほかれと㊦

7 いつくにーいつくの㊦㊧

11 をはりーおはり㊦㊧

とかやひろくとおひたゝしき河ありゆきゝの人あつまり

1 おひたゝしき―をひたゝしき⑦
1 河―川⑦

て舟をやすめすさしかへるほといとゝこゝろせうかしかまし

2 いとゝこゝろせう⑦ノこゝろハ菱⑧―いと
ゝ心せう⑦―いとゝこゝろせう⑧

くおそろしきまでなのしりあひたりからくしてさる

へき人みなわたりはてぬれと人々もこしやむまと待い

4 人々も―ひとくも④―人とも⑦
4 待いつる―まちいつる④

つるほと河のはたにおりゐてつくくゝとこしかたをみれば

5 河―川⑦
5 おりゐて―をりいて⑦―おりいて⑦

あさましけなるしつのをともむつかしけなるものともを

6 しつのをとも―賤の男とも④―しつのをの
をとも⑦

舟にとりいれなとする程何事にかゆゝしくあら

そひてあるひは水にたふれいりなとするにもみ

8 あるひは―あるいは⑦
8 たふれいり―たはふれいり⑦

なれすものおそろしきにかゝるわたりをさへへたてはて

9 ものおそろしき―物をそろしき⑦

ぬれはいとゝみやこのかたはるかにこそはなりゆくらんと

10 かた―かたは⑦
10 はるかにこそは―はるかにこそ⑦
10 なりゆくらん―なりゆくらめ⑧

おもふにはいとゝなみたおちまさりてしのひかたくかへ(十七才)

11 なみたおちまさりて―涙をちまさりて⑦

らんほとをたにしらぬ心もとなぎに過ぎつる日かすの

(十七ウ)

ほとなきにとまる人々の行すゑをおほつかなく恋

しきこともさま／＼なれとすみたかはらならねはこと／＼

ふへきみやことりも見えず

5 おもひいて／＼名をのみしたふみやことり

あとなきなみにねをやなかまし

10 このく／＼なりてはおほきなる川いとおほしなるみの

うらのしほひかた音にき／＼けるよりもおもしろくはま

千とりむら／＼にとひわたりてあまのしわざにとし

10 ふりにけるしほかまとものおもひ／＼にゆかみたてたる

すかたともみなれすめつらしき心ちするにも思ふ事

1 らんーらむ⑩

1 心もとなぎにー心もとなぎよ⑩

1 過ぎつるーすま／＼つる⑩⑪

2 ほとなきにーほとなきに⑩

2 人々のー人／＼の⑩⑪

3 かはらーかわら⑩

8 音にーをとに⑩⑪
8 おもしろく／＼をもしろく⑩

9 しわざーしわざ⑩

10 ゆかみたてたるーゆかみたてる⑩

なくてみやこのともにもうちくしたる身ならましかは

1 身ならましかは―身ならましかはと②④

人しれぬ心の中のみさまくくるしくて

2 中―うち②

これやさはいかになるみの浦なれは

おもふかたにはとをさかるらむ

4 とをさかるらむ―とをさかるらん②④

5 みかはのくにやつはしといふ所をみればこれもむかしには

5 みかは―みかわ②

あらずなりぬるにやはしもたゝひとつそみゆるかき

つはたおほかる所ときゝしかともあたりのくさもみな

かれたるころなれはにやそれかとみゆるくき木もなし

なりひらのあそむのはるくきぬとなけきけんも思ひ

9 あそむの―あそむの②④―あそひけむの②

9 きぬ―きぬる④

9 なけきけん―なけきけむ②④

10 出らるれとつましあれはにやされはさらんとすこし

10 出らるれと―いてらるれと②④

おかしくなりぬみやこいてゝはるかになりぬれはかのく(十八才)

にの中にもなりぬはまなのうらそおもしろきところな (十八ウ)

りける波あらししほの海路のとななるみつうみのをちお敷

いたるる敷けちめにはるくとおひつゝきたる松のこたち

言など絵にかゝまほしくそみゆる おちつきところの

さまをみればこゝかしこにすこくをろかなるいゑるとも

のなかにはおなしかやゝともなとさすかにせはからねと

はかなげなるあしはかりにてむすひをけるへたてと

もゝかけとまるへくもあらすかりそめなれとけにみやも

わらやもとおもふにはかくてしもなかくにしもあら

10 ぬさまなりうしろはまつはらにてまへにはおほきな

る川のとかになかれたりうみいとちかければみな

1 おもしろき—をもしろき

2 をちいたる (敷ハをニお敷、いニる敷ト傍書) —おちいたる ⑦ ⑧

4 絵に—ゑに ④ ⑤

4 おちつきところ—をちつきところ ⑥

5 すこく—すこし ⑦ ⑧

5 をろかなる—おろかなる ⑨

5 いゑる—家ぬ ⑩—いゑい ⑪ ⑫

10 まへには—前は ⑩

11 川—河 ⑬

このなみこゝもとにきこえてしほのさすときは

1 きこえてーきこゑて⑦

この河の水さかさまになかるゝやうにみゆるなと

2 河ーかは⑦⑧

さまかはりていとおかしきさまなれといかなるにか

3 おかしきーをかしま⑦

心とゝまらず日かすふるまゝにみやこのかたのみ恋

・
しくひるはひめもすになかめよるは夜すからものを

5 夜すからー夜もすから⑦⑧

のみおもひつゝくるあらいそのなみのをとままくらのをと

6 まくらのーまつらの⑦
6 をとにーもとに⑦⑧

におちくるひゝきには心ならずも夢のかよひちた

7 おちくるーをちくる⑦
7 たえ果ぬへしーたへはてぬへし⑦

え果ぬへし

こゝろからかゝるたひねになけくとも

ゆめたにゆるせおきつしらなみ

ふしの山はたゝこゝもとにとそみゆる雪いとしろくて

(十九才)

10

10 おきつーをきつ⑦

11 こゝもとにとそーこゝもとにそ⑦⑧⑨
11 いとしろくてーいとしろくて心ほそし⑦⑧⑨
いとしろくてこゝろほそし⑩⑪⑫ハ錯簡

風になひくけふりのすゑもゆめのまへにあはれ

(十九ウ)

なれとうへきものはと思ひけつころのたけそも

のおそろしかりけるかひのしらねもいとしろく見

三 わたされたり かくてしも月のすゑつかたにもなりぬ

5 みやこのかたよりもともにふみとものあまたあるを

みれはいとおさなくよりはくゝみし人はかなくもみす

てられて心ほそかりつるおもひにやまひになりて

かきりになりたるよしをとりのあとのやうにかき

つゝけておこせたるをみるにあはれにかなしく

10 てよろづをわすれていそきのほりなんとするは人

のおもふらんことゝものさはかしくかたはらいたければ

1 すゑ―すへ^①

1 ゆめのまへに―ゆめのまへに(一説)

2 うへき―うへなき^②

3 おそろし―をそろし^③

4 すゑ―すへ^④

5 かたよりも―かたより^⑤

5 ともに―ナン^⑥

6 みすてられて―すてられて^⑦

7 心ほそかりつる―心ほそかりし^⑧

9 おこせたるを―をこせたるを^⑨

10 のほりなん―のほりなむ^⑩

11 かたはらいたければ―かたはらいたけれど
(一説)

とにかくにさはるへきこゝ地もせねはにはかにいそきたつを

1にはかにーにはかに⑦「下ノには見セ消テ」

みちもいとこほりとちてきはりかちにあやうかるへきを

たゝいまはかくしくうちそふ人もなくてなとさまくと

とむる人もおほかりければおもひわひてねのみなかるゝ

4 おほかりければーおほかれは⑦

をみる人も心くるしくとてともすへきものともなと

これかれとさためてのほるへきになりぬいとうれし

6 これかれとーたれかれと⑦ー誰かれと⑧

けれととにかくにおもひわけにし事なくなにと又みや

こへかへるらむとあちきなくものけしこゝとて又

8 かへるらむーかへるらん⑦⑧ーかへらん⑨

8 ものけし(⑧)けハ宇ノカナノ譚ナルベシ(ーものうし⑨)

たちかへらん事もかたければものことになこりおほかる

9 たちかへらんー立掃らむ⑨

心地するにもうちつけにものむつかしき心のくせ

になんつねにより居つるはしらのあらしくしきか

(二十才)

11 11 なんーなむ⑩
11 つねに(⑦ノにハ補入)ーつね⑨
11 より居つるーよりいつる⑦ーよりあつる⑧

なつかしからさりつるもたちはなれなんはさすかに心ほそ(二十ウ)

くて人見わくへくもあらすちいさくかきつくれとめはや

き山かつもやとつゝましなから

わするなよあさまきのはしらかはらすは

またきてなるゝおりもこそあれ

三このたひはいと人すくなに心ほそけれと都をうしろ

にてこしおりのこゝちにはこよなく日かすのすくるも

こひしきこゝちするそあやにくにわか心よりおもひ

たちていてぬれとわれなからさためなくたひのほと

10 も思ひしられされといとはすに日かすもうららち

にてとゝこほる所もなかりけるをふはのせきになり

4 あさま(㊦)ハなニキイ、(㊧)ハまニキ歟ト傍書—あさまき(㊨)

5 おり—をり(㊩)

7 こしおりの—こしをりの(㊪)
7 日かすの—日かす(㊫)

10 日かすも—日かけも(一説)

11 にて—に(㊬)
ふは—ふわ(㊭)

てゆきたゝふりにふりくるにかせさへましりてふき行

1 ふき行もーふきゆくも②③ーふき雪も②ー吹雪も②④

もかきくれぬれは関屋ちかくたちやすらひたるにせ

きもりのなつかしからぬおもゝちとりにくゝなにをか

3 おもゝちとりにくゝーをもゝちとりにて②④

なとゝめんと見出したるけしきもいとおそろしくて

4 見出したるーみいたしたる②③④ーみ出したる②④

4 おそろしくてーをそろしくて②

かきくらす雪まをしはしまつ程そ

5 程そー程に②④

やかてとゝむるふはのせきもり

6 ふはーふわ②

三京に入日しもあめふりいてゝかゝみの山もくもりて

7 入ーいる②④

みゆるをくたりしおりもこの程にてはあめふり

8 おりもーをりも②

いてたりしそかしと思ひいてゝ

このたひはくもらはくもれかゝみやま

10 くもらはくもれーくもゝ日くもれ②④

人をみやまこ殿のはるかならねは

(二十一才)

11 みやまの (②まニこ殿ト傍書)ーみやこの②④

かくおもひつゝくれとまことにかの人をみやこはちか(二十一ウ)

き心のみはかりにていつるをかきりにとおもひかへす

そまたかきくらす心地しける日たくるまゝにあめ

ゆゝしくはれてしろき雲おほかる山おほかれはいつくに

5 かとたつぬれはひらのたかねやひえの山などに侍る

といふをきくにはかなきくもさへなつかしくなりぬ

きみもさはよそのなかめやかよふらん

みやこのやまにかゝるしらくも

くれはつるほとにゆきつきたれはおもひなしにや

10 こゝもかしこも猶あれまさりたる心ちしてとこ

ろくもりぬれたるさまなとなに心とまるへくもあ

2 いつるをーいつを(2)

4 おほかるーをほかる(2)

5 ひえーひへ(2)

5 侍るとー侍と(2)

7 かよふらんーかよふらむ(2)

10 猶ーなを(2)

11 心ー心の(2)

11 とゝまるへくもーとゝまるへくも(2)ーとゝ
まるへきも(2)

らぬをみやるもいとはなれまうきあはらやののきな

らんとそゝろにみるもあわれなりおい人はうち見え

てこよなくをこたりさまにみゆるもうき身をたれ

②はかりかうまでしたはむとあはれもあさからす そのゝ

⑤ちは身をうき草にあくかれし心もこりはてぬるにや

つくくとかゝるよもきかそまにくちはつへき契こ

そはと身をも世をもおもひしつむれとしたはぬ

こゝちなれは又なりゆかんはていかゝ

われよりはひさしかるへきあとなれと

しのはぬ人はあはれともみし

2 あわれなり―あはれなり②
2 おい人は―をい人は②

4 したはむ―したはん④

7 したはぬ―したかはぬ(一説)

8 なりゆかん―なりゆかむ⑧

10

諸本解説

現在知られている『うたゝね』の主な伝本としては個別的写本が三本、叢書所収本が三本ある。後者のうち二本は刊本である。これら伝本については既に「うたゝね考」(次田香澄・二松学舎大学論集八昭和四十七年度V)において概説され、東山御文庫本を現存の写本では最もすぐれたものとされているが、これを基盤として更に検討を加え、諸本の関係を考えてみたいと思う。

(1)東山御文庫本 御所本。袋綴、美濃版で、表紙は卵色。うら表紙綴込み部分にわずかに虫損あるほかは、表紙・本文ともに真新しいものゝように、よく保存されている。「うたゝね」と左上にある題簽は藍地、竜文の型紙のもの。料紙二十四枚のうち墨付二十二枚、巻首内題(第一行上部)に「うたゝね」とし第二行下部に「安嘉門院四条」とある。第三行から本文、本文は毎半葉十一行、一行十八字(二十七字(二十二、三字がもとも多い)、和歌は大体五字下げで二行に書く。最後の中務の歌も、本文に続けてそれ以前の歌と同じ様式で書かれてある。近世前期、古くとも寛文年間、おそらくは元禄ごろの書写と判断される。東山御文庫本『うたゝね』(以下「東本」と略称。校異符号はⓈ)は東山御文庫の同類の写本と対比してみても、靈元院が公卿の所持本を借りて書写させられた一類かと言われる。なお、昭和二十八年三月、野口菊雄氏による奥書のある模写本が書陵部に存する。

(2)尊経閣文庫本 すでに玉井幸助氏による紹介があるが(日記文学の研究)、今回の調査とは小異もあるので改めてこ

ゝに概要を記す。雁皮紙、袋仮綴、横25・5センチ、縦17・5センチの冊子横本。第一紙表右下端に

己巳八月七日書写初校相濟／半藤元右衛門 己巳八月十四日再校相濟／大村五郎左衛門

の小書識語、更に右半部に亘って暢達な筆跡で藩主前田綱紀公の次のごとき識語が存する。己巳は元禄二年に当る。

白仙所持之古筆にて写之／但牛庵了任極札にて 後醍醐天皇／宸筆と証又黄門俊景証文ヲ奥ニ被加之然共書体

宸翰と難窮／乍去又是様偽書ニ繕ヒタル^(ママ)也 仍令書写書品憊ニおるては可入／手輯也 己巳八月十五日

再校了

墨付四十枚、原本は小型横本だったらしく墨付部は横11センチ、縦8.5センチ。第一紙表左端に「うたゝね」と題するが作者名はない。毎半葉十一行、一行十一、二字、本文三十八丁、その最終面には、それ以前より大きめの字体で中務の歌を散し書きにしてある。さらに、最終紙に俊景の証文が添えられていることは綱紀識語にいうとおりである。(以下「尊本」と略称。校異符号は㊟)

此うたゝね一冊／後醍醐天皇 宸／筆無疑者也／三月中旬／黄門俊景

(3)松平文庫本 縦27・5センチ、横20センチ、袋綴。表紙左上に「うたゝね」の題簽がある。墨付三十九枚、本文最後の歌はそれ以前の歌と異なり散し書き風(六行)にしてある。また、最終面には本文と同筆で

這一帖者安嘉門院右衛門／佐述作也

の奥書がある。松平文庫本(以下「松本」と略称。校異符号は㊟)は尊本と密接な関係がある。すなわち、松本は尊本の親本かその転写本を書写したもので、尊本が毎半葉十一行書きであるのを松本では十行に書く。しかし、一、二字ないし数字分次面の第一行にはみ出したり、尊本の次面の数字分を繰上げて最終行に収めている場合がある。松本はまた錯簡本によって写したものである。すなわち、本文二十三丁表の冒頭に「かへりみかちに」(尊本二十二丁裏最終部)があつて、次に「くさ木もなし」から「いとしろくて」までの部分(尊本三十一・三十二丁に当る)が二十四丁裏まで挿

入して書かれてある。そして、二十五丁表の冒頭「こゝろはそし」（尊本二十三丁冒頭）は、尊本のごとく「かへりみかちに」に続くべきを、所拠本（あるいはその前本）の綴じ違え（三十一・三十二の二丁を二十二丁と二十三丁との間に錯入のまゝに写したため、「いとしろくて」（尊本三十二丁最終部）に続く体裁になっているのである。

(4) 扶桑拾葉集所収本 扶桑拾葉集は元禄二年徳川光圀公編集の三十巻から成る日記・序文集である。その巻十二に『うたゝね』その他を収める。扶桑拾葉集には、元禄二年ならびに明治二十七年刊の板本のほか、国会図書館蔵の写本（榊原芳楚納本の、もと東京図書館蔵本）をはじめ全国に写本が多数所蔵されている。国会図書館本の『うたゝね』には脱文が二ヶ所（一七〇七程↓8する、一九〇六みすて↓7やまひに）見えるほか、誤字・脱字もかなり多いが、板本にはそれがなく諸本中もとも東本に近い本文を有する。扶桑拾葉集所収板本（以下「扶本」と略称。校異符号は㊦）は冒頭に「うたゝね」と題し、東本の「安嘉門院四条」とある位置に「阿仏」とある。毎半葉十一行、和歌を二行（大体三字下げ）に書く体裁も東本に似るが、一行の字数はやゝ少なく、適宜読点を付し、二丁表から二十七丁表まで本文、同丁末行から引続き『庭のをしへ』が始まる。扶本は底本を明らかにしていないが、次に記す群書類従本とも密接な関係が認められる。

(5) 群書類従所収本 これのみ「うたゝねの記」と題し「阿仏」とする（以下「群本」と略称。校異符号は㊧）。板本は毎半行十二行、巻三百三十一の二十六丁から四十七丁におよぶ。和歌は一字下げ、おゝむね一行に収める。奥書に扶桑拾葉集を以て校合した旨記すがその校異は示されておらず、かなと漢字の相違のほかは（諸本中、漢字表記がもっとも多い）群本の本文はほとんども扶本と一致する。ただし、この本独自の本文も少なからず見え、その多くは諸本共通の問題点においてよく意の通ずる本文である。たとえば「とゝめかたければ」（一三〇七）を「とゝめたりければ」、「いとゝこゝろせう」を「いとゝこゝろせう（いと所狭う）」（一七〇七）とするなど、伝本の中でもっとも分かりよい。あるいは恣意によって改めたものかと思われる。

(6) 驚宿雜記所収本 驚宿雜記は五百六十九巻におよぶ叢書で駒井乗邨の文化十二年の自序がある。国会図書館蔵の写本卷二三一に「うたゝねの記」を輯するが、それに記されてあるとおり群本を写したものである。

校本四本は、尊本・松本の二本と扶本・群本の二本との二系統に大別できる。たとえば冒頭の作者名を底本の東本は「安嘉門院四条」とするが、尊本・松本はナシ、扶本・群本は「阿仏」とするごとくである。今回、翻刻本文下欄に注記した校異およそ300項の中では、87項において尊本・松本共通に他と対立し、33項において扶本・群本共に他と対する。前者においては松本は尊本の、後者においては群本は扶本の後出本と認められる。

諸本中、もっとも独自本文を多く有するのは尊本であって、実に135項を数える。多くは仮名遣の相違であるが、これは、おそらくは尊本がその独自性を示さんために東本ないし東本系の本文の仮名遣と異なる仮名遣に意識的に改変したものと思われる。(『甲陽軍鑑』寛永頃刊本の十行本と十一行本との間などにも同趣の様相が見られる。) たとえば同じ「音」でも、東本の「音」に対しては「をと」(一五オ2・一七ウ8等)であるのに、東本「をと」の場合には「おと」(七ウ11・一六オ6等)とする。松本は多くの場合、この種のことを訂したのではないか。たとえば、他本の「すまゐ」(二五ウ1)に対して尊本・松本の本文は「すまひ」、この「ひ」を松本は「ゐ」と訂しているなどがその痕跡と認められる。「居ところ」(六ウ11)に対して尊本「いとところ」松本「るところ」(二〇オ11「より居つる」も同趣)、「つゐて」(二ニウ6)に対して尊本「つひて」松本「ついで」などの例がこれを物語る。松本は尊本の親本ないしその系統の錯簡本の写しであることは前述したが、個々の点についてもこのように尊本系統の後出本であることを知るのである。尊本に次いで独自本文を有するのは群本であって、62項を数える。他の諸本と比較してみると次のごとき事実につながる可能性がある。

これかれと㊸㊹㊺↓たれかれと㊻↓誰かれと㊼

おそらく扶本は「こ」の類似字形である「た」の別体字を契機として「たれ」と誤ったものであろう。つまり、東本・尊本・松本の「これ」と群本の「誰」との間には、扶本の本文を介在させてみて始めて連絡をつけ得るのである。また、『うたゝね』成立のころには既にかなり一般的であったと思われる係り結びの呼応の崩れなどが、群本のみ正格に従うものなども、群本における手直しを予想せしめる。

一七〇10

いとゝみやこのかたはるかにこそはなりゆくらん

いとゝ都の方はるかにこそなりゆくらめ(群本)

なりひらのあそむのはるゝきぬとなけきけんも

なりひらのあそんのはるゝきぬるとなけきけんも(群本)

一八〇9

この類は、群書類従本一般に共通した、編纂過程における一種の合理主義ともいうべき、本文作成の問題にかゝわるものゝごとくである。

独自本文は松本は11に過ぎず、扶本にいたってはわずかに4項のみ、いずれも東本の13を下まわる。その意味ではこの両本は誤脱少ない書写による本文といえよう。

二系統の間では尊本・松本の方が扶本・群本よりも低位の写本と思わせる場合が少なくない。たとえばこの両本には「水にたふれいり(倒入)」「(二七〇8)」を「水にたはふれいり」とするとき著しい誤写本文が部分的に少なからず見られるからである。

なりひらのあそむの(一八〇9)ーなりひらのあそひけむの

くもらはくもれ(二一〇10)ーくもゝ日くもれ

この限りでは扶本・群本の方を先出とすべきかと思われるが、かならずしもそうとばかりは言えない。ことは例の錯簡本にかゝわる。すなわち、尊本ないしその系統の二丁錯簡による書写である松本の錯簡本文の末部

ふしの山は…雪いとしろくてこゝろほそし、

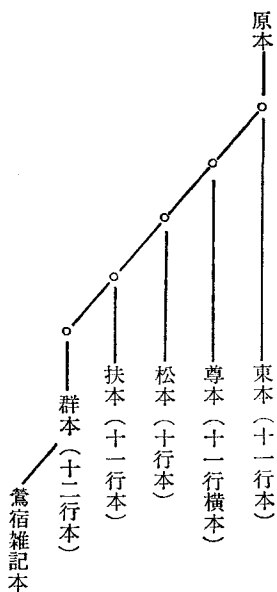
一九〇一

を扶本や群本もまたそのまゝ存している事実である。まづ白な富士の山が「心細い」とはいかにも没論理で唐突な表現ではなからうか。群本は扶本ないしその親本に拠ったとして、おそらくこの「こゝろほそし」は、扶本ないしその親本の所拠本が錯簡本であったことの痕跡であろう。つまり、錯簡本に拠ったのであるがその錯簡に気づいての修復の際、この一文節だけ残してしまつたのである。そこで前の方（二三ウ三）では

つるにこなたかなたへ行別れ給ふほと、いといたうかへりみかちにかの所にゆきつきたれば、かねて聞つるよりもあやしくはかなけなる所のさまなれば、いかにしてたへ忍ふへくもあらず、

と、「こゝろほそし」を脱した奇妙な長文となり、後の方（二九オ11）では白雪の富士が心細くなつてしまつたのである。部分的には確かにもっとも東本に近い佳良な本文を有する扶本ではあるが、おそらくは修復後の努力にかゝわるものであり、右の一事をもつても扶本・群本は系統的には尊本・松本より後出とせざるを得ない道理である。

現存本に到るまでには各本とも何代かの書写を重ねているであろうから東本といえども誤脱なしとしないが、それらの諸点を捨象すれば、系統的な諸本の関係は次図のように想定していゝように思う。



次のごとき校異はこの間の事情を象徴するものごとくである。

ふはのせきになりてゆきたゞふりにふりくるにかぜさへまじりてふき行もかきくれぬれば閑屋ちかくたちやすら
ひたるに…

二一〇一

圈点の部分で尊本・松本は「ふきゆくも」と仮名書きにするが、扶本はこれを「かぜさへまじりてふき、雪も、かきくれぬれば」と読点を打って読み、「ゆく」を「雪」とする。群本はさらに「風さへまじりて吹雪もかきくれぬれば」と漢字化を進めて、東本の「ふき行」風はついに猛「吹雪」と変じてしまったのである。尊本・松本が東本のまゝ「ふき行も」であったならばこうはならなかったであろう。

なお、東本の傍書「一敷」とする五ヶ所(二一〇五・三〇六・一一ウ八・一八ウ二・二一〇一)と「一イ」とする一ヶ所(二〇ウ四)はすべて扶本と一致する(群本は二〇五で少異)。「イ」から推せば扶本系統の異本を参照したかとも思わせるが、むしろ、扶本においてこれら傍書を参考にして本文に取り入れたと考えるべきであろう。

あしわけにて㊸㊹〔㊸ハケノ右下ニ舟落敷ト傍書〕↓あしわけ舟にて㊺↓あしわけ船にて㊻

二〇五

また、次のごときは、扶本・群本が尊本・松本系をも参考していることを物語るものと思われる。

なけきつゝ㊼㊽〔つゝニ㊽ハ侘イ、㊼ハわひト傍書〕―なけきわひ㊾

七〇一

かくて東本は、

1 素姓と書写年代が比較的确实であり、東山御文庫の他の同類写本から推測して、質的にもそれらと近いものと思われる。

2 行末などに一字の脱落程度は時にあっても、誤写と認められる箇所が極めて少ない。

3 恣意によって改めたと思われる箇所がないと目される。

以上によって東本は、現存本の中ではもっとも信ずべき、またよい条件をそなえた伝本ということが出来よう。底本に採った所以である。